

ラオス北部における生態的・文化的多様性と家族農業の生活戦略

園江 満

(日本大学生物資源科学部)

I. はじめに

ASEAN10 各国のうち唯一の陸封国であるラオス人民民主共和国（以下、ラオス。）は、近年サービス業および鉱業・製造業に牽引される堅調な経済成長を遂げているが、労働人口の面では依然 8 割近くが農業に従事する農業国である。作目の構成比率も変化しつつあるものの、農家の 9 割以上が稲作を行っており、後発開発途上国ながら一人当たりの年間精米消費量 208 kgを賄う（園江 2014a）自給農業を基盤とする分散型社会となっている（横山ら編 2008）。

表1 ラオスにおける農業の概要(2012)

果名	作目	種				メイズ	イモ類	野菜類	ラッカセイ	ダイズ	リュウノウ	タバコ	ワタ	サトウキビ	コーヒー	チャ
		延収種面積 (ha)		稲												
		水田水稲	陸稲	雨季水稲	乾季水稲											
ボンサラー		18,582	7,209	11,170	203	4,415	3,420	4,765	750	185	155	-	-	1,700	15	1,960
ルアンナムター		18,755	11,592	4,644	519	4,280	1,575	3,215	300	95	85	75	100	2,105	-	-
ウドムサイ		24,615	14,157	9,922	536	34,270	1,100	7,335	1,435	930	0	740	180	365	165	305
ボークーオ		25,921	14,590	8,742	2,589	13,555	175	455	375	290	-	55	-	0	-	-
ルアンビヤーン		36,531	13,593	21,625	1,313	8,850	4,300	8,895	1,220	175	315	1,200	125	90	10	125
フアビ		30,131	11,840	16,415	1,876	18,840	2,025	6,750	205	430	-	80	35	200	-	30
サイエンブリー		49,609	31,441	15,272	2,526	61,040	3,315	5,980	3,940	50	260	310	50	165	-	-
ヴィエンチャン首都		76,310	55,548	-	20,762	2,470	9,020	10,330	85	90	640	155	-	195	-	-
シェンクアーン		29,647	21,045	8,502	100	26,045	6,370	2,935	340	5	5	50	-	120	0	-
ヴィエンチャン		65,716	52,031	7,073	6,612	6,590	5,120	22,570	1,495	135	525	685	0	145	-	-
ボリカムサイ		42,324	33,756	3,388	5,180	3,720	11,385	8,580	1,210	85	40	830	-	2,470	-	-
カムアン		71,499	61,374	681	9,444	1,485	2,040	6,495	85	0	-	920	25	155	-	-
サヴァンナケート		205,820	173,117	1,417	31,288	3,700	8,695	11,440	1,205	10	30	1,200	1,215	12,140	-	-
サラブーン		86,973	70,727	6,011	10,235	3,895	4,380	7,875	6,605	40	-	280	-	110	15,000	-
セーコーン		11,079	7,528	2,784	767	1,225	1,285	1,445	715	55	5	60	5	450	6,760	-
チャムパーサク		118,054	104,813	-	13,241	2,150	2,720	11,920	1,655	1,300	1,285	290	175	30	31,245	285
アタプー		24,201	21,667	2,126	408	505	320	610	0	0	-	45	-	30	680	-
全国		933,767	706,028	119,772	107,967	196,815	67,155	121,595	21,620	3,885	3,345	6,975	1,890	20,490	56,875	2,705

資料: SS(2013: 41-54)

また、稲作以外の特徴としても、収穫面積に関する農業統計からみるとコーヒーとチャおよび市場指向性の極端に強い中部のサヴァンナケート県にお

ける生産を除いたサトウキビといった嗜好品では、特に地域差が大きく（表 1）ラオスの農業を概観するうえで北部と中・南部を区分して検討する必要を示唆している。ラオスの領域を含む東南アジア大陸部山地から中国西南部の山間盆地では、かつてタイ系民族を中心としたムアン (mū'ang) と呼ばれる盆地連合国家群が展開し、現在でもなお国境を越えて多言語・多民族下に緩やかに結びついた一つの複合文化交流圏としての「タイ文化圏」という地域的広がりを維持している（新谷ら 2009 など（図 1））。

筆者は、これまでもこの「タイ文化圏」の概念設定を援用してラオスの農村と農耕文化について研究を行ってきたが（園江 2006; 2014a など）、本報告では、東南アジア大陸部山地の一角をなすラオス北部を中心に、伝統的



(新谷ら編 2009) を一部改変

タイ文化圏概念図

で多様な生態的・文化的環境下において商品作物栽培の普及や土地の利用・管理形態の急速な変化に対して小規模農家が対応し、ときに強かに生産活動と生活を維持しているのかを見てゆきたい。

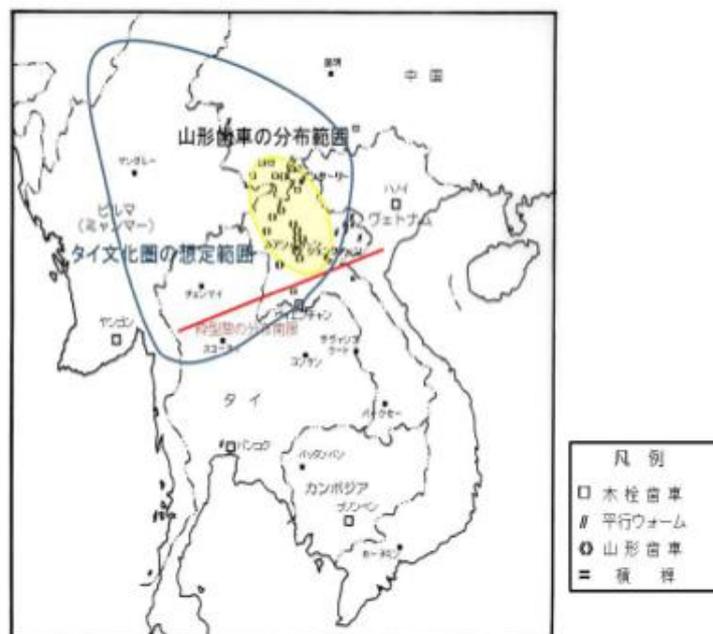
II. ラオス北部の民族と農村の暮らし

既に述べた通り、ラオスには 49 の民族が住んでおり、言語的には大きく 4 つのグループに分かれるが、ラーオを中心とするタイ系民族は概ね全国に住民が分布しているのに対し、先住民と目されるモン・クメール系では民族集団により居住分布が南北に分かれており、チベット・ビルマ系、ミャオ・ヤオ系の各民族では、中部以南の分布は限られている（新谷ら編 2009）。また、同じ言語グループ内でも実際に話されている各民族の言語はかなり異なり、特に全体として全国に居住するモン・クメール系の言語は、北部に住む民族を中心とした北方モン・クメール系言語と南部の東方モン・クメール系言語では意思の疎通ははかれず、一括りに論ずることは適当でない。

2005 年に実施された第 3 回国勢調査の結果からは、農村と農家規模の面では、各村落は 50 から 130 世帯程度で構成され、世帯規模も平均で一世帯当たり 5.9 人であり、一部の例外を除いては家族農業によって家計が維持されていることがわかる。なかでも本報告の対象地域であるラオス北部の集落は、平均 5.9 人の 75 世帯で構成されており（前同）、規模の面からはラオスの農村を代表したものといえる。

これらの農村では、陸稲または水稲による稲作を基盤としながらも、伝統的に籐やシェラックあるいは野生動物といった特用林産物の採集や仲介による農外収入があるほか（Nooren ら 2001; Yamada ら 2004; 横山ら編 2008 など）、織物や製糖あるいは製鉄にみられる農村工業によって地域と各民族固有の農家経済を構成している。18 世紀にラオス北部と中部の境界に位置する現在のシェンクアーンに興ったタイ系の土侯国であるプアン国は、古くから近隣の地域に対して鉄などの産品を流通させていたが、ラオス北部に見られる轆の形状などからは、横型を使う北方系鍛冶技術と縦型の南方系鍛冶技術の双方が見られ（新谷ら編 2009）、サトウキビとサトウヤシの原材料の違いと甘蔗搾糖機という動力伝達ギヤを持つローラー式の複雑な生産工具の分布境界（図 2）から、砂糖生産に関してもこの地域に二つの異なる文化的背景を持った技術が存在したことを暗示している。技術と技能、物資と流通、労働力とその編成からなる手工業生産の技術は、今なお多様な民族間の文化的・技術的交流の舞台であった痕跡を残しているのである。

また、南部で換金作物としてコーヒーがフランス植民地期に導入されたのに対し、北部のチャは現在でも嗜み茶というタイ文化圏を特徴づける利用がなされているが（Rattanavong 2008）、喫茶用の高級茶葉として新たな市場を形成する可能性があり、伝統的養蜂技術でも中部でタイへの国境貿易と通じて消費されているハリナシミツバチが、北部では原初的養蜂(meliponiculture)として飼育下にあることが確認され（園江 2014b）るなど、ラオスの農村には、在来知に根ざした遺伝



(ダニエルス編 2014)

図 2 犁・搾糖機の分布とタイ文化圏

資源の多様性保全と文化的に連続性を持った適正技術として有効利用するための源泉が満ちている。

Ⅲ. 農村の変容と農民の対応

これまでラオスの農村における農村の変容は、自給的・自立的であったラオスの農村の生活基盤が商品作物の導入と近隣諸国の植林等への投資による自給作物栽培から自給作物の商品化及び換金作物への転換の過程である「換金作物移行期」を中心に論じられている。しかしながら、南部のボラヴェン高原では本来採集狩猟と小規模な焼畑陸稲作を生業としていたモン・クメール系民族のラヴェンがコーヒーを栽培し、その売却益によって主食で



図3 ポンサーリー県におけるコーヒー栽培勧誘の看板

あるコメを購入するという換金作物栽培を主生業とする「換金作物移行後」の農村が早くから存在したことを箕曲（2014;2015）が論じており、ラオス北部の状況を普遍化して全国に当てはめることはできない。

しかしながら、1990年代中盤以降ラオス北部ではハトムギやゴマあるいは、飼料用トウモロコシ相場の乱高下による作付の拡大と縮小が繰り返され、同時期に栽培が開始され、2000年から導入された契約栽培などパラゴムノキは中国・タイ・ヴェトナムからの投資を背景に急激に拡大している。このアクターである「国境を跨ぐ人と人とのネットワーク」（横山ら編 2008）は、近年顕著になった中国向けバナナやコーヒーの栽培（図3）にみられるように伝統的な技術的・文化的交流とは異なるチャンネルにおける技術や栽培品種の流入や乾季水田裏作でのスイカ契約栽培など（落合編 2014）をもたらし、稲作による自給農業を基盤として小規模な裏作や森林産物の採取によって補完される伝統的生業構造と土地利用形態の変化は進展している。

Ⅳ. おわりに

ラオスの農林業を捉えるうえで「伝統的なあり方に普遍的な価値を見出そうとする」豊かな生態資源と人々の在来知という資源と、「さまざまに変容する様子に、地域特有の経過や結果を見出そうとする」諸外国からの援助や市場経済化の中での人々の取組みによりラオスの今が形作られている（横山ら編 2008）とする視点は、実に正鵠を射たものである。

現在注目されているチャに関しても、ラオス北部のポンサーリー県において樹齢400年におよぶ古木が発見され話題となったが、この地域では近年になっても植物・昆虫だけでなく脊椎動物の新種が見つかるなど遺伝資源の宝庫であり、それを利用・保全する在来知を民族固有の文化は、地域の生態によった環境認識に基づくものである。

しかしながら、今日急速に進む社会経済開発の中で諸民族のアイデンティティは均質化し、固有の文化や在来知も急速に消滅の危機に曝されている。

ラオス農業の相対的優位性は、近隣諸国と比較して森林資源が維持された豊富な生態資源と農村の文化的多様性によって担保されるといえる。ここでは、画一的で大規模化とは異なる農業・農村開発の発想が必要であり、その主体となりえるのが個性を持った各農家であり農村の紐帯と考えら

れるのではないだろうか。

<参考文献>

- 箕面在弘 (2014) : ラオス南部コーヒー栽培地における農民富裕者の誕生要因, 東南アジア研究 **51** (2) , pp. 297-325.
- (2015) : フェアトレードの人類学 ラオス南部ボーラヴェーン高原におけるコーヒー栽培農村の生活と協同組合, めこん, 475p.
- Nooren, Hanneke; Gordon Claridge. (2001) : *Wildlife Trade in Laos: the End of the Game*, Netherlands Committee for IUCN, 304p.
- 落合雪野編著 (2014) : 国境と少数民族, めこん, 237p.
- Rattanavong, Humpham. 2008. *Mianglāo Sā-chakkaphat* [The Imperial Tea] . Saphā-vithanyāsāt hæng Sāt [Lao Scientific Committee] , 57+xx.
- 新谷忠彦・クリスチャン・ダニエルス・園江満編 (2009) : タイ文化圏の中のラオス 物質文化・言語・民族, 慶友社, 401p.
- 園江満 (2006) : ラオス北部の環境と農耕文化 タイ文化圏における稲作の生態, 慶友社, 269p.
- 園江満 (2014a) : 山地民としてのタイ Tay—ラオスにおける生産技術の諸相から, ダニエルス, C. 編, 東南アジア大陸部 山地民の歴史と文化, 言叢社, pp. 279-318.
- (2014b) : ラオスにおけるミツバチの伝統的利用に関する予察報告, 熱帯農業研究 **7** (別1) , pp. 103-104.
- Sūn Sathit hæng Sāt, Kasūang Phāngkān læ Kān-longthū'n(SS) [Lao Statistics Bureau, Ministry of Planning and Investment] . 2013. *Sathiti Pacham Pī 2012* [Statistical Yearbook 2012] . SS.
- Yamada, Ken'ichiro; Yanagisawa Masayuki; Kono Yasuyuki; Nawata Eiji. (2004) : Use of Natural Biological Resources and Their Roles in Household Food Security in Northwest Laos, *Tōnan Ajia Kenkyū* [Southeast Asian Studies], 41 (4), pp. 426-433.
- 横山智・落合雪野編 (2008) : ラオス農山村地域研究, めこん, 453p.
- Yokoyama, Satoshi; Kohei Okamoto; Chisato Takenaka; Isao Hirota eds. (2014) : *Integrated Studies of Social and Natural Environmental Transition in Laos*, Springer, 160p.